

埼玉県本庄市

旭・小島古墳群発掘調査報告書

本庄市教育委員会

序

本庄市は、従来より埋蔵文化財の宝庫といわれるように、太古より住みよいところであったことが想像されます。郷土の礎を築いた、先人たちの栄古盛衰は、遺跡や文化財として残されていますが、このような歴史が刻まれた大地の上に、今日の本庄市が成り立っていることを鑑がみますと、心身ともに躍動を覚えます。

最近では埼玉県北部、児玉郡市の中核都市として、開発事業も発展の一途をたどっています。

これらの開発事業と、文化財保護事業の調整を図りながら、貴重な文化遺産を調査し、後世に伝えるべく、遺跡の発掘調査を鋭意進めております。

今回、旭・小島古墳群の調査を県教育委員会文化財保護課のご指導のもとに、本庄市教委職員の長谷川勇、岸隆雄、反町光弘、増田一裕の諸君を中心に、地元の多くのみなさんと発掘作業にあたってくれました。霜柱が日中まで立ち、赤城おろしのふく中での調査も今年度で、一応事業の終了をみましたので、ここに報告書を取りまとめました。

繁忙の中に作成いたしましたので、不備の点もあるかと思いますが、ご叱正いただければ幸甚に存じます。

御指導いただいた諸機関並びに、先生方や作業に従事されたみなさん、なにかと温いご配慮をいただいた地元のみなさん方に、心からのお礼を申しあげて、ごあいさついたします。

昭和57年3月25日

本庄市教育委員会教育長

飯 島 彰

例 言

1. 本書は本庄市教育委員会が、昭和55、56両年度に実施した、旭・小島古墳群範囲確認調査報告書である。
2. 調査は国庫補助を得て実施した。内訳は昭和55年度が国庫2,502,000円、県費1,251,000円、市負担1,251,000円の総予算5,004,000円。昭和56年度が国庫2,800,000円、県費1,400,000円、市負担1,400,000円の総予算5,600,000円で行なった。
3. 発掘調査は本庄市教育委員会が実施し、長谷川、岸、反町、増田が担当した。調査組織は第1章第2節に示した通りである。
4. 本報告書の執筆は増田、反町が担当し、長谷川の指導のもとに増田が編集した。実測、製図は増田、反町が行なった。
5. 本調査に際して、次の諸機関、諸氏より御指導、御教示をいただいた。記して感謝します。
埼玉県教育委員会文化財保護課、上里町教育委員会、本庄市生活環境課、本庄上里学校給食センター、栗原文蔵、井上勝明、駒宮史郎、杉崎茂樹、管谷浩之、外尾常人、笹森健一、水島治平、桑原正明、
塩原三郎、町田惣吉、小林正、長浜照枝、古沢栄一、山本常吉、秋山昭三、桑原繁、（以上発掘調査地土地所有並びに管理者）
塩原喜一（下野堂自治会長）、茂木雄二（万年寺自治会長）、福島喜弘（小島自治会長）、山本厚生（長松寺住職）、植田賢太郎、茂木久知、（以上聞き込み調査等協力者）

目 次

序 文	
例 言	
第1章 調査の経緯と経過	1 (反町)
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 古墳群の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 旭・小島古墳群の調査	4
第1節 研究小史と分布現状	4
第2節 近八幡支群	7
第3節 蛭子塚支群	7
第4節 小島支群	12
第5節 万年寺支群	14 (反町・増田)
第6節 三田支群	16
第7節 遺 物	19
第4章 考 察	20

挿 図 目 次

第1図	分布調査風景	1
第2図	発掘調査風景	1
第3図	児玉郡市周辺の地形と古墳群分布図	2
第4図	昭和10年旧旭村地籍図	6
第5図	蛭子塚支群第1、2号墳測量図	7
第6図	蛭子塚支群第1号墳埴輪出土状態	8
第7図	蛭子塚支群1、2号埴断面図	9
第8図	蛭子塚支群第7、34号墳測量図	10
第9図	坊主山古墳周濠平面図	11
第10図	坊主山古墳断面図	12
第11図	諏訪大明神古墳周濠実測図	12
第12図	三奈山古墳分布図	14
第13図	三奈山古墳断面図	15
第14図	二子塚古墳周辺平面図	16
第15図	昭和22年航空写真	17
第16図	昭和10年地籍図（左）と復原図（右）	17
第17図	二子塚古墳断面図	18
第18図	遺物実測図	20

旭・小島古墳群発掘調査

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

本庄市は埋蔵文化財が濃密な地域として周知である。しかし、県北部児玉郡市の中核都市としての開発がめざましく、これに対処する文化財保護対策も重要な課題となっている。旭・小島古墳群は、本庄市小島、下野堂から児玉郡上里町に分布し、かつて100余基を数えたが、現在では11基（本庄市側のみ）が盛土を残すにすぎない。これらの一部は市指定文化財として保護されている。一方、地域的に特色のある遺跡、群として価値のある遺跡として埼玉県選定重要遺跡にあげられている。だが、多くの古墳は古来より削平化が著しく、個々の正確な所在地や、所属時期、群の構成あるいは、古墳群の範囲など不明な点が多い。現状において盛土を残すものはほとんどみられないが、未だ古墳遺構の一部である周溝などが残存するものと考えられる。したがって、完全に遺構が消滅したわけではない。以上のような状況から、本庄市教育委員会では、昭和55・56両年度に調査を実施することになった。実施にあたっては、昭和55年4月25日付け本教社発第125号で、埼玉県本庄市長より埼玉県教育委員会を經由して、文化庁長官あて、昭和55年度文化財保存事業費補助会として、文化庁に通達した。これについて文化庁は、昭和56年6月30日付け委保第71号で、埼玉県教育委員会を經由して、交付することに決定したと回答した。同じく、昭和56年4月24日付け本教社発第105号で、昭和56年度国宝重要文化財等保存整備費補助金として、同様の通達をし、文化庁より昭和56年6月29日付け委保第71号で決定したと回答した。係る補助金を得て両年度に範囲確認調査および、整理を行ない、ここに調査報告をまとめた。

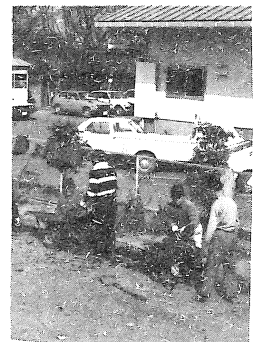
第2節 調査の組織

発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	本庄市教育委員会
教育長	飯島 彰
社会教育課	
課長	島田徳三
課長補佐	金井善一（昭和56年3月31日まで）
〃 〃	長谷川道夫（昭和56年4月1日より）
係長	高田節子（昭和56年4月1日より）
係	伴 瑞江（昭和56年3月31日まで）
文化財係	長谷川勇
〃 〃	岸 隆雄（昭和56年3月31日まで）
〃 〃	増田一裕（昭和56年4月1日より）
〃 〃	反田光引（昭和57年3月31日まで）
調査担当者	長谷川勇、岸 隆雄、増田一裕
調査補助員	反町光弘
作業員	地域住民延619名



第1図 分布調査風景

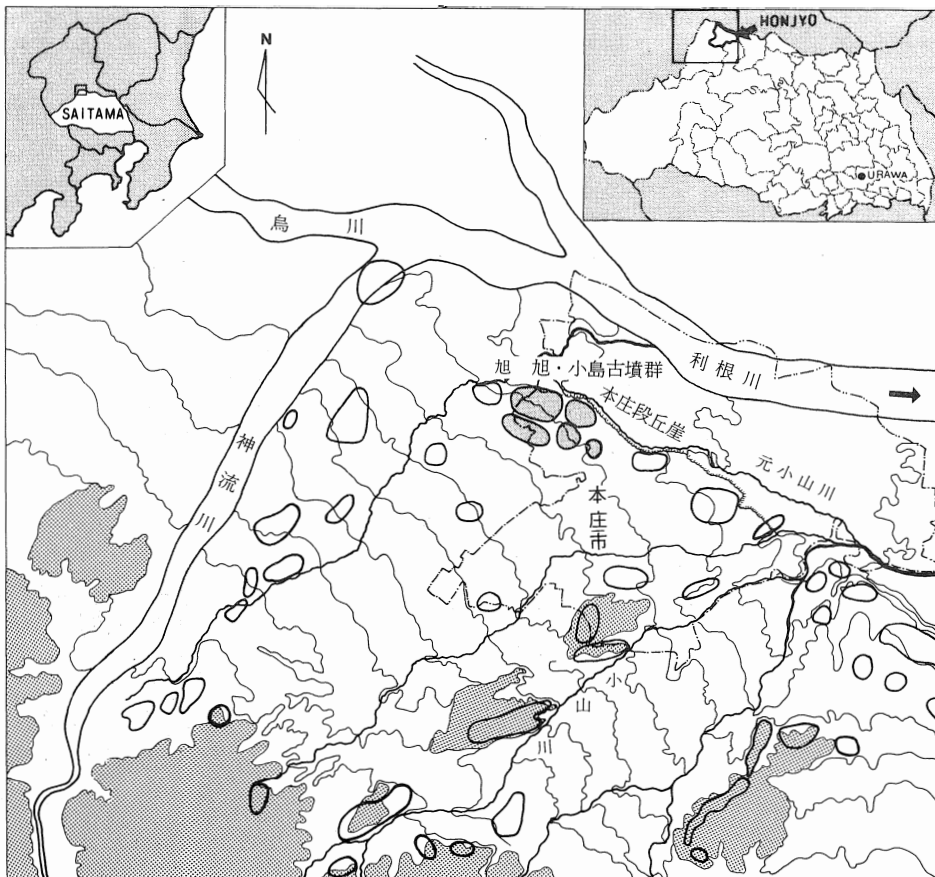


第2図 発掘調査風景

第2章 古墳群の立地と環境

第1節 地理的環境

本庄市は南に秩父山地をひかえ、北辺には利根川の流れを見、さらに西方から東方にかけて男体、赤城、榛名、浅間の山々が遠望される。市街地および、今回報告する旭・小島古墳群は台地上に立地している。この台地は本庄台地と呼ばれ、秩父山地に端を発し利根川に合流する神流川によって形成された扇状台地で、その扇頂部は群馬県鬼石町浄法寺付近にもとめられる。本庄市は神流川右岸側に所在しており、神流川および利根川の左岸は群馬県に属する。市内の等高線は北方で東西に走り、東方では南北に走る扇状地特有の孤状を描がいている（第3図）。扇端部は最高所で比高差9mの崖面を見せ、これを本庄段丘崖と称している。段丘崖は本庄市東方の東五十子付近から市街地の北側をへて、本古墳群をのせる小島の北側から児玉郡上里町神保原付近まで、南東から北西へ利根川にほぼ平行して走る。しかし、本庄市と上里町の境界付近では崖が不明瞭となり、字万年寺周辺では緩かな地形を見せている。段丘崖の北方一帯の低地は利根川の氾濫原となり、下流で妻沼低地を形成している。なお、段丘崖下には元小山川が崖に沿って東南流しており、大里郡岡部町で小山川に合流する。



第3図 児玉都市周辺の地形と古墳群分布図

旭・小島古墳群が立地する付近の本庄台地は標高55～62mを数え、等高線は段丘崖に平行して走る。扇状台地の成立は前記したごとく、神流川によって運ばれた堆積物で構成されている。上流では三波川が支流として合流している。三波川周辺は地質時代の標式地として「三波川帯」の名で著名である。この付近で産出する岩石は片岩類やチャート、あるいは花崗岩などの古生層、基盤岩類より成り、これらの堆積物で本庄台地は形成され、立川面に比定されている。段丘礫層の上面は、いわゆる関東ローム層が覆っているが、発達しておらず層厚は0.5～1.5m程度で鍵層も未発達である。重鉱物組成による観察によれば、浅間山や榛名山起源のテフラと推定され、板鼻黄褐色軽石層の分布南限にも含まれている。このため埼玉県南地方とは異なり、北関東地方のテフラ構成と分布に順づる。以上のような産出物は古墳を築造する際に、盛土はロームや黒色土を、葺石には段丘礫層の亜円礫を用い、石室や石棺材などは片岩や火山礫、川原礫を利用し、古来より自然の恩恵をこよなく受け入れていた。

第2節 歴史的環境

旭・小島古墳群をのせる本庄市西部の台地上は、遺跡分布の密度が多い地域として従来から周知である。しかし、これは現状で判明するごく一部にすぎない。本地域周辺で最古の遺物は、本庄第1号遺跡（付図1）に含まれる石神境遺跡より、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。また、三空山古墳上より増田が尖頭器を表採している。縄文、弥生両時代の遺跡、遺物は少ない。しかし、三空山遺跡や御手長山古墳をはじめ、同時代の遺物は増えつつある。最近では下野堂地区より須和田式の弥生式土器片が採集されている。古墳時代とそれ以降の遺跡は、段丘崖付近に沿って土師器の散布地が広がる。この内、本庄第8、9、10号遺跡の接点にあたる小島本伝遺跡では、和泉Ⅱ様式の竪穴式住居址が検出されている。他に石神境遺跡からは著しい土師器の堆積を確認しており、当地における鬼高Ⅱ様式の編年資料を提供している。一方、古墳墓は本庄第4号遺跡の中央部で、下野堂方形周溝墓群が検出されている。これは旭・小島古墳群の消長を論じる上で重要な発見である。さて、本報告の主体である古墳は、かつて100余基存在したと伝えられているが、現在では11基ほど遺存（地表面上に）するにすぎない。旭・小島古墳群に接して三田古墳群や、上里町七木本古墳群が立地する。これらもまた、本古墳群同様依存度は悪い。近接する古墳群として重要な遺跡である。古墳時代以降の遺跡、遺物については、本庄第1～12号遺跡までが概当する。これらは奈良・平安時代に属する。平安時代に編さんされた『和名類聚抄』によれば、武蔵国賀美郡に小嶋（小嶋）郷が見え、この郷の成立が土師器の散布地とどのようなかわりを持つものか興味深い。しかし、『新編武蔵国風土記稿』によれば、小島は児玉郡に含まれている。中世に至ると武蔵武士の成立を見る。武蔵七党の内、丹党である小島氏が構えた館址は、長松寺周辺に求められる。現状は長松寺を中心に西側に土塁と空堀が遺存し、南側と北側の1部にも同様な遺構を残している。近世には中山道の取り付けにはじまり、北関東と南関東地方をつなぐ要所となるが、これは現代でも国道17号線や国鉄高崎本線、あるいは、二本松通りの開通に伴ない、交通網の従実とともに工場や宅地の進出が目立ち、本庄市は埼玉県北部地方の主要都市となっている。このような状況で、本付近の遺跡の調査と保護も早急は命題となって来た。

第3章 旭・小島古墳群の調査

第1節 研究小史と分布現状

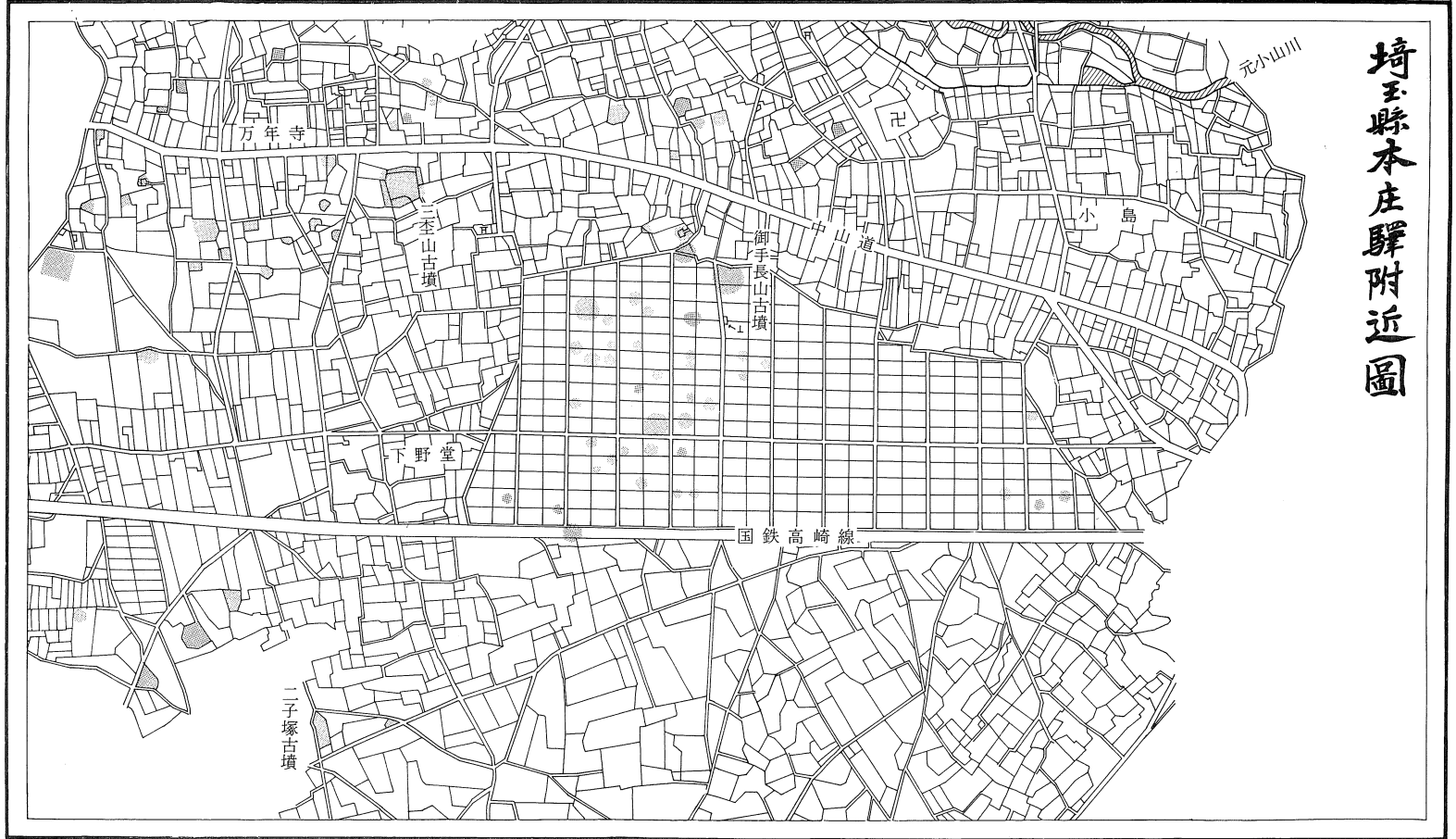
研究小史 かつて、小島は一面塚の原と言われたほど、大群集墳を形成していた。しかし、古墳群の詳しい調査が行なわれる以前に、その多くが削平されたことは遺憾である。本古墳群の記録および調査は古く、昭和3年刊の児玉郡誌に利根川流域の古墳群として紹介されている。また、東京大学蔵の男子人物埴輪に小島出土品がある。盗掘による被害も多く、遺物の出土は常に言い伝えられているが、資料のほとんどは定かでない。一方、古墳群の規模については昭和26年刊の埼玉県史に小島10基、下野堂17基を数え、昭和30年の埼玉県教育委員会が実施した時点で37基が確認されている。その後、長谷川勇氏の行なった調査では44基を認めている。だが、これらは盛土を残す古墳を中心に確認可能なかぎり数えられたものと思われ、伝承などに見られない古墳がまだかなり存在するようである。昭和45年刊の『日本の考古学』Ⅳには「旭古墳群」として前方後円墳3基を含む100余基の古墳群と明記されている。ところで、近年の埼玉県遺跡地図（昭和50年）ではわずかに11基（本庄市にかぎる）を数えるにすぎず、これらは現在市指定文化財あるいは、信仰の対象物を設置した形で保護されている。また、公共機関以外の調査では、菅谷浩之氏を顧問とする本庄高等学校考古学部による測量調査や報告なども貴重な資料を提供している。しかし、分布範囲の正確な限界や規模あるいは、性格などの本格的な調査は立ちおけているのが現状である。このような分布調査を中心とする記録に対して、古墳自体の発掘調査が行なわれたのは小島の御手長山古墳が最初であった。同報告書報文中には大縮尺の地形図を用いた古墳分布図も記載されており、同古墳の構造、性格ともども貴重な資料として注目される。これに対して、近年の宅地造成に伴う大規模な調査（付図1斜線）では、下野堂遺跡や三空山遺跡などより、調査者が予期しない所より方形周溝基群や古墳址が多く検出されている。これらは地表面での痕跡や言伝えがまったくなく、周辺地域の発掘調査次第ではさらに類別が増加することを暗示している。後者の三空山遺跡では6基の古墳址が検出されたことにより、それまで単独大型墳と思われていた三空山古墳は、支群を形成していることが判明した。このように旭・小島古墳群と言えどもある程度の支群をなして群集墳を構成しているものと推定される。

支群の設定 旭・小島古墳群が大規模群集墳であることはよく知られているが、ただ広範囲に散在するのではなく、ある程度の支群を形成していることが、長谷川勇氏作成の分布図（長谷川 1978）より把握される。しかし、前項で記したように各支群のまとまりは、最終的には全面的な発掘調査により解明されるものと思われるが、結論に達するまでには長く待たなければならない。したがって、現状で判明する分布の集中度をもとに支群別けをし、支群ごとに古墳番号を付加えた（付図1）。なお本庄市を中心に分布図を作成したが、西辺の上里町にかかる部分も一部付加えたが完結ではない。したがって、古墳数の最終結果は将来の成果を待たなければなるまい。

各支群については東限に『近八幡支群』が所在し、4基認められる（以下付図1参照）、近八幡、下前原にかかる。一面塚の原と呼称された部分は現在の小島二丁目から三丁目一帯にあたり、30余基の小古墳を中心に形成されている。字蛭子塚、堂場、上前原に分布する。特に密集する部分の小字名を取り『蛭子塚支群』と命名する。この支群の北側に接して、御手長山古墳を含む11基の大型古墳な

どが点在する。字上前原、元屋敷に所在するが、これらは現在本古墳群で最も保存良好な地区で『小島支群』と名づける。小島支群の西方には三杵山古墳や八幡山古墳、上里町浅間山古墳などの盟主級古墳が立地する。これらは互いに独立する支群あるいは、単独墳に近い状態と考えられていたが、今回の調査で散在してはいるが一つの支群を形成していることが伴明した。その分布は上里町神保原字東台まで広がるが、群の中心地区の名称をもって『万年寺支群』と命名した。ただし、将来的には本庄市、上里町両側においてさらに支群別けされる可能性を残している。なお、本支群内に所在する『下野堂方形周溝墓群』は別あつかいとする。万年寺支群の南、国鉄高崎本線を越えた下野堂字開拓、二子塚には前方後円墳を含む6基の古墳が点在し、西限は上里町七本木字三田開拓まで広がる。「三田古墳群」として周知であるが、本古墳群に帰属する見開もある。これは本古墳群各支群の近接状態を考慮した時、支群の範ちゅうに含めることが可能なので『三田支群』として把握した。同様に万年寺支群の西方、国鉄神保原駅の周辺に「七本木古墳群」が存在するが（第3図）、旭・小島古墳群の西限となる可能性を残している。以上周辺の古墳群を含めて6つの支群を構成しているが、今回は近八幡支群、蛭子塚支群、小島支群、万年寺支群、三田支群を『旭・小島古墳群』の現在伴明している支群範囲としたが、各支群がさらに細分されることと、周辺の空白地にも古墳が存在する可能性は十分に考慮される。

上記した5支群内の古墳の多くは、削平され位置が判明するのみである。発掘調査により遺構の再確認がなされたものは少なく、今や民家の下に遺構が埋没しているものが多く、すべてを紹介することは不可能である。しかし、ほとんどが削平されたとは言え、未だ周濠部分や関連する遺物が残されており、完全に消滅した別ではない。したがって、今回は測量調査や一部の発掘、聞き込み調査での位置の再確認等をもとに、現状を提示し古墳群の範囲とこれらの周知を意図して報告する。また、個別の古墳の位置は聞き込み調査によるものが多く、必ずしも付図1に記載された古墳の位置、規模が正確であるわけではない。これらは将来の発掘調査により解明されよう。



埼玉縣本庄驛附近圖

第4図 昭和10年旧旭村地籍図（アミ目は古墳）

第2節 近八幡支群

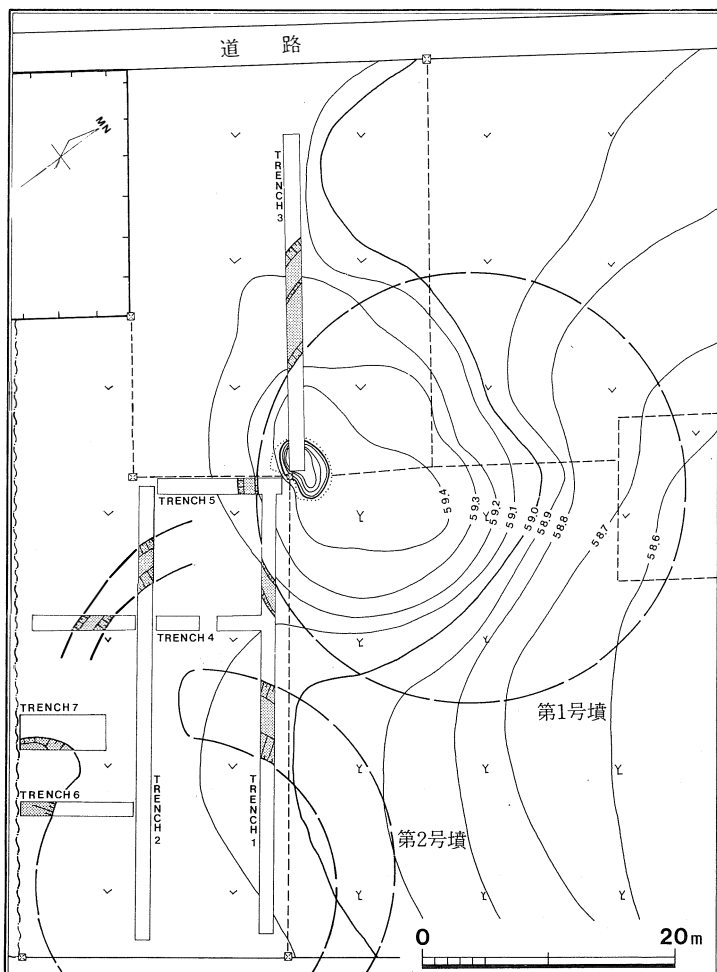
旭・小島古墳群の東限にあたり、金鑽神社の西方400mに所在する。御手長山古墳調査報告書中（長谷川 1978）に、分布図が記載されている。聞き込み調査と地籍図の調査では、これら以外に判明しなかった。市街化の著しい地域であり、今後再確認の発掘調査を必要とする。現在4基記録されているが、小規模な支群と思われる。支群が立地する標高は59mを数え、平坦地で現在わずかに畑地を残している。第1号墳（小島一丁目4番9号）、第3、4号墳（小島一丁目7番28号）が民家の下にあたり、調査は不可能である（写真図版2-1）。第2号墳（小島一丁目8番地）は、墳丘の半分がねぎ畑にかかり、極くわずかな高まりが畑地に観察される。これらはともに円墳と推定される。

第3節 蛭子塚支群

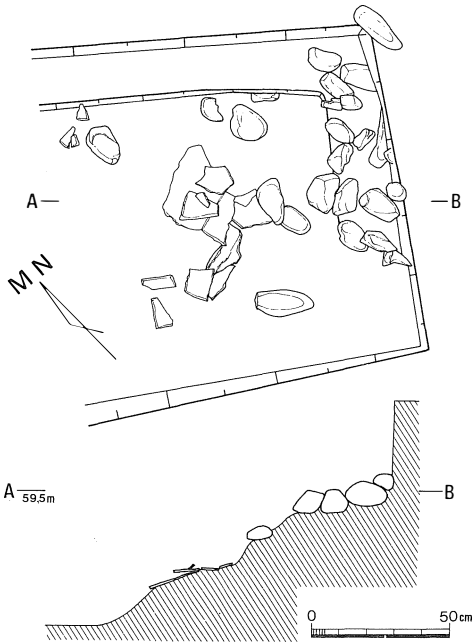
「蛭子塚」という小字名が付すごとく、多数の古墳が群集し、現状では万年寺支群とともに規模が大きい。昭和14年の栗田剛氏撮影による写真の古墳群が本支群にあたる（写真図版2-2）。写真によれば、すでに当時から墳丘上は耕作地として開墾されていたようで、盛土の流失も進行している。

また、昭和10年発行の本庄駅周辺地籍図（第4図）によれば、本支群を中心とした地区が開拓区画整理されており、地籍図上で古墳を確認することは困難である。この区画整理は近年の市街化開発に直接利用され、現在小島地区では最も宅地化が進行する結果となった。聞き込み調査などから35基を数えるに至ったが、多くは宅地下に埋没している。なお、近八幡支群からは西北方400mの距離にあたり、ほぼ旧中山道と国鉄高崎本線の間に分布する。

第1号墳 本庄市小島字堂場378.381-1.
383-1.385(墳丘)(周濠)
現本庄市小島3丁目5番地



第5図 蛭子塚支群第1、2号墳測量図



第6図 蛭子塚支群第1号墳埴輪出土状態

発掘調査は耕作の関係上南側に接する畑に7本トレンチを設定し、本墳の南東に近接する第2号墳の範囲確認も同時に行なった(第7図)。第1トレンチは幅1m、長さ36mとし、周濠の確認に重点を置いたが、他のトレンチも同様の意図で行なった。本トレンチでは2本の周濠を認めるが、西側の遺構が本墳に関連するものと考えられ、その延長上に第5トレンチで検出された周濠が位置する。幅2m、現地地表下0.9mを測かる。両者は黄褐色ローム層を0.2m掘りくぼめており、最下層は暗褐色のしまった粘質土でその上に黒褐色土をのせている。第3トレンチは残丘部分から西北へ27m設定した。トレンチのほぼ中央部で周濠が検出されたが、幅7mを測かり2段になる。深さは現地地表下1.1mで、堆積状態は第1トレンチ内周濠と同様である。平面上の遺構の延長上に第1、5トレンチ内の周濠と関連するが、幅が異なる点で様な幅の周濠ではないらしい。墳丘の直径は各周濠の内縁円周から、径30mに復原される。このことから残丘部分は墳丘裾にあたる事が判明した。残丘部分に設定された第3トレンチでは、葺石、埴輪が出土した。層序は黄褐色ローム層上に黒灰褐色土があり、その上に遺物が包含されていた。これは黒灰褐色土層が旧表土であることを示しており、周濠部分までは墳丘盛土が残存しているものと考えられる。

出土した遺物は少ない。第1トレンチでは周濠内より須恵器が出土している(写真図版5-1)。この周濠に接した褐色土層中より打製石斧が検出された(写真図版5-1)。第3トレンチの東側は残丘部分で葺石、埴輪、須恵器が散乱していた(第6図、写真図版5-2)。埴輪は家で付近より表面採集されたものと接合され、竪穴式住居の形態を示している。これらの遺物出土地点から西北2.5mの地点で土師器坏が出土している。以上のごとく墳丘南面の裾に接して遺物が集中しており、墓前祭祀の跡と考えられる。

本支群の北辺に位置し、桑畑となっている(写真図版3-1)。墳丘そのものは削平化が著しく、円形の微高地が観察される。地目の境界にはまったく古墳としての痕跡をとどめていない。1000分の1航空測量図によれば北東側を走る標高59mの等高線が、本古墳の影響を受け弧状にのびている。地表面での計測によれば直径28m前後を測かるが、発掘調査によりさらに規模が増し、墳丘中心も現状よりずれていることが判明した。測量調査では標高59mの等高線前後に墳丘がよく反映されており、北および、東側が旧状をとどめている(第5図)。しかし、南側は削平が著しい。南側には境界石柱付近が長径5m程の残丘を残しており、現墳丘高は1.2mを測かる。墳丘の東西を走る等高線は南へそれぞれ彎曲しており、周濠の存在を暗示している。

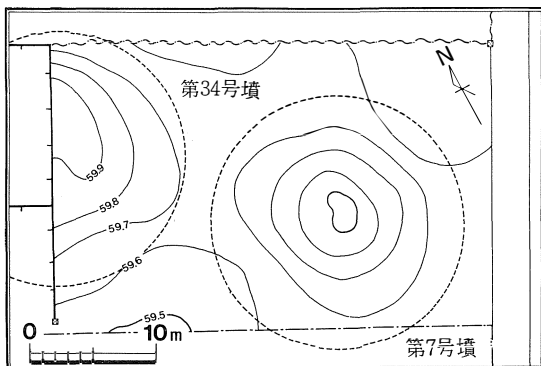
蛭子塚支群第1号墳は径30m、周濠最大幅6.5mを測かる大型円墳で、内部構造は墳丘中心部を発掘していないため不明であるが、角閃石安山岩片が多量に散乱しており、横穴式石室の存在を指示している。また、周辺の畑地に散布する15cm前後大の礫は葺石と考えられる（写真図版3-2）。出土した土器は鬼高Ⅲ様式に所属する。以上のことから本墳は7世紀前半に所属する古墳と推定され、御手長山古墳とほぼ同時期、同様相を示す古墳であり、周辺に分布する古墳との規模の比較から盟主級古墳と考えられる。

第2号墳 本庄市小島字堂場385、386

現本庄市小島3丁目5番地

第1号墳の南に接して立地する。畑地により耕作のため平坦な地形を見せる。標高は59.1mを測かるが、地表面に古墳の痕跡はまったく認められない。分布調査時には極く微量の土師器細片を得た。第1号墳と同時に範囲確認のための試掘を行なった。トレンチは北西から南東に至る2本と、これに直交する3本を設定した（第5図）。第1トレンチでは先述したごとく2本の周濠を検出したが、内南東部のものが本墳に属する。第2トレンチにおいてはこの延長が存在しなかった。トレンチの南東半分には黒褐色土層が下底部に広がるが、周濠内に堆積している黒灰褐色土とは異なり、旧表土層と考えられる。本トレンチの北西部には小規模な周濠あるいは溝と思われる遺構が検出された。しかし、その方位は第1トレンチで検出されたとの周濠とも合わない。第6、7トレンチの南半部より検出された周濠は、外縁部が民家の下にあたるため確認はできなかった。これらは深さ、幅、堆積状態から第1トレンチ南東の周濠と同一のものと思われる。第7トレンチの周濠はとぎれており、第2トレンチにおいてもこれらに関連する周濠の痕跡は認められなかったことから、全周を回るものではないらしい。第1トレンチおよび、第6、7トレンチの周濠から復原された第2号墳の直径は約24mと推定される。周濠の規模は幅5.5m、深さ1m（現地地表下）を測かる。内部主体については、墳丘中心部近くを走る第2トレンチの観察で、近年のかく乱が著しく消滅した可能性がある。ただし、道路よりで人頭大の加工された角閃石安山岩を採集したが、本墳のものか第1号墳に帰属するかは互いに近接するため不明である。出土した遺物は土師器坏が第7トレンチで出土している。鬼高Ⅲ様式に所属する。

第1・2号墳の南方に第7・34号墳が立地する。両者は近接して円形の微高地形を残存する。測量調査を実施したところ、ある程度の復原がなされた。第7号墳は現高50cmを数える。等高線は60mから



第8図 蛭子塚支群第7、34号墳測量図

59.7mまで円形に回るが、59.6mの等高線は三方において彎曲している。周ぐる等高線および、現地で目測される裾部の状態から直径は20m前後と推定される。第34号墳は西半分が宅地下に埋没している（第8図）。半円形の等高線は南半部でくずれている。高さ40cmを測かり、復原直径は第7号墳と同じく径20m前後と考えられる。両古墳の推定墳丘裾部はわずかに2mの間隔をおく。周濠の存在も等高線の状態から予測されるが、あるいは

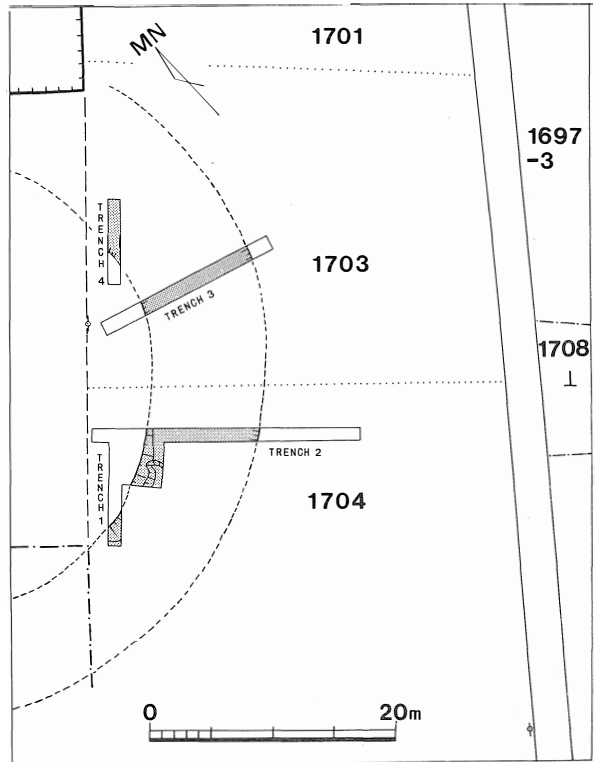
周濠が眼鏡状になっているかも知れない。表面採集された遺物は土師器小片が多い。ただし、両古墳が近接するため、どちらの遺物であるかは判明しない。時期的には鬼高Ⅲ様式に属する。他に角閃石安山岩の小片が散乱している。

坊主山古墳（第9号墳）

本庄市小島字上前原1703、1704、1705

現本庄市小島2丁目10番地

御手長山古墳の西60mに所在する。現状は宅地、畑地となっており、旧状は他の古墳と同様に地目境界にほとんど反映されていない。境界杭の近くにわずかに残丘が観察され、その周辺は微高地形を呈している。1000分の1航空測量図によれば、標高59mの等高線が不定形な楕円状に一周しており、この部分がくぼむため周濠と考えられた。これは今回の発掘調査で実証された。本古墳は国道17号線の取り付け工事に伴ない破壊削平された。現在墳丘の中央部は民家、檜畑となっているため、トレンチの設定は東側に接して4本放射状に設営し、周濠の確認を行なった（第9図、写真図版6-2）。周濠は幅9m、深き現地表下1mを測かる（第10図）。周濠内縁を墳丘裾として復原したところ直径36mを数えた。これに対して周濠外径は56mと墳丘に比較して周濠が大規模であることを示している。出土遺物は若干の須恵器と埴輪片を得たが、表面採集では円筒埴輪片が多量に散乱していた。また、葺石材と考えられる多量の礫や、角閃石安山岩が周辺畑地に散布している。



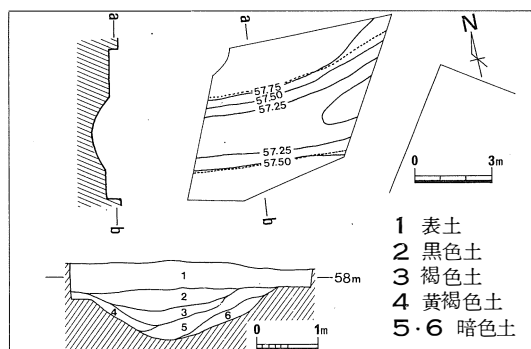
第9図 坊主山古墳周濠平面図

第4節 小島支群

蛭子塚支群が小円墳を中心に構成されているのに対して、本支群は主として大型の円墳よりなり、分布は散漫的である。残存状態の良好な6基を含む計11基より構成されるが、周辺には削平された古墳が存在するかも知れない。

諏訪大明神古墳（第1号墳） 本庄第139号遺跡 本庄市小島字元屋敷751(墳丘) 750(周辺)
現本庄市小島4丁目4番地

本支群の北側に位置し、旧中山道（現勝場・宮本線）と国道17号線の間に所在する。付近の標高は57mを測り、本庄段丘崖はこの付近で北へ突出し、本古墳より北250mで崖面に達する。このため周辺は緩やかに傾斜している。墳丘部分の地目は林で檜が全体を覆っている。周辺は道路、畑地、宅地となっているが、最近では墳丘を取り囲むように民家がせまっている。墳頂部は平坦で諏訪大明神の社が鎮座している。墳形は円墳で、ほぼ円形の



第11図 諏訪大明神古墳周濠実測図

の等高線を描がくが、南側石段の東付近は若干入りくむ。現直径は27m、高さ3.5mを測かる。墳頂部は平坦で社の礎石などに人頭大からその2倍大の角閃石安山岩が使用されており、墳丘西側の畑地にも1個みられた。横穴式石室材と思われる。墳丘斜面で1点の円筒埴輪片を採集している。ところで、本墳の外部施設については墳丘下辺に葺石が認められる。さらに、周濠については等高線上にあまり顕著ではないが、昭和54年11月に本庄市教育委員会で墳丘南部を調査し、周濠を確認した（第11図）。幅3m、深さ1.2mで、墳丘裾は現墳丘裾より2m外に出る。このため、従来は径30mを数える円墳であったと考えられる。

第2号墳 本庄第138号遺跡 本庄市小島字元屋敷80(墳丘) 77. 79. 81(周辺)
現本庄市小島4丁目7番地

諏訪大明神古墳の西方70mに位置する（写真図版7-2）。標高、立地は前項と同じである。地目は共同墓地で、周囲は畑地である。しかし、民家もせまっている。墓地に利用されているため、依存度は悪くかなり削平され平坦な台地状になっている。墳丘の北裾を走る標高57mの等高線は西と東側で入りこみ、周濠の存在を示唆するものと思われる。墳丘の西側と南側の崖面には拳大から2倍大の円礫が多く露呈しており、葺石の一部である。墳形は円墳で径30m、高さ2mを測かるが、旧状はやや増すであろう。墳丘周辺で円筒埴輪片を採集している。なお、第1号墳と本墳の間の畑地で埴輪片を表採しているが、この部分に古墳が存在したものは不明である。

第3号墳 本庄第135号遺跡 本庄市小島字上前原1675(墳丘) 373-2,1674,1676(周辺)
現本庄市小島3丁目7番地

旭・小島古墳群では保存状態の良好な古墳で、後述する2基とともに、昭和51年12月27日に本庄市指定文化財として保護されている（写真図版8-1、9-1）。付近の標高は58mで、地目は墳丘が

雑木林、周辺は畑地、道路である。墳形は円墳と考えられるが、耕作により周辺はかなり矩形化している。北および、東側は崖状になり、墳丘盛土の状態が観察される（写真図版9-2）。北崖の露頭面によれば、封土は灰褐色土と黒灰色土、黄褐色土を互層に盛り上げ、版築状を呈している。層厚は5cm~20cmを測かる。墳丘の西側には埴円礫が多く露出しており、葺石が圍繞するものと推定される。また、人頭大半分程度の大きさの角閃石安山岩を採集しており、横穴式石室の存在を暗示しているが、石材にノミ痕などの加工痕はない。墳頂部で円筒埴輪片が採集されている。現直径は南北25m、東西26m、高さ3.6mを数えるが、周辺の調査により直径はさらに増加するものと思われる。400分の1測量図（付図2）をもとに墳丘規模の復原を行なうと等高線の弧状が均等に回る部分は南西側にあたる。この部分を基本に等高線を復原すると直径は20mとなる。この場合の中心点は標高60.8mの等高線が東で内彎する部分にあたり、東側の崖面は想定される主体部の位置近くまで進行していることが判明する。なお、東西に走る道をも旧墳丘裾と推定すれば径23mに達する。墳丘周辺については、西側の畑地で標高58.1mの等高線がコの字形に彎曲しており、幅5m前後の周濠の存在が予測される。

第4号墳 本庄第136号遺跡 本庄市小島上前原1677-3(墳丘) 1673、1677-1(周辺)

現本庄市小島3丁目1番地

墳丘上に3本の木が立ち、草地となっている（写真図版8-2）。第3号墳から東へ50m、第5号墳の真北に接している。墳丘裾部は耕作地として削られ、方形を呈する。南および、西側は中段部分で崖状となり、葺石材や角閃石安山岩が多く散乱している。葺石材は墳丘裾部周辺に散布していることから、その旧状を暗示するものであろう。角閃石安山岩は、人頭大前後でノミ痕を残し、特に南側に集中して認められることから同方向に開口する横穴式石室を内蔵するものと考えられる。南側の崖面観察によれば、黒褐色土とパミスを含む黄褐色土の互層がみられ、腐植土層とローム層を盛土に使用したものと考えられる。この崖面には埴円礫を段積みにした遺構が露出しているが、石室そのものではなく内部構造に関連するものであろう。現直径は東西19m、南北17m、高さ3.3mを測かるが、周辺の削平部分を考慮すれば規模が増加しよう。400分の1地形図をもとに復原を試みると、弧を描く等高線が最も均等に分布するのは北斜面の墳頂部が裾部にあたり、西裾面も明瞭な弧状を描く。西裾面を底辺として円周をもとめると直径20mを測かり、南側の破壊が著しい状態を示している。周濠が存在するものと思われるが、等高線上には反映されていない。

第5号墳 本庄第137号遺跡 本庄市小島2丁目11番地1713(墳丘) 1676-2、1677-1、1707、1709、1709-2、1713-2(周辺) 現本庄市小島2丁目11番地

現存する3基の内、最も大型な古墳である（写真図版10-1）。地目は雑木林で、周辺は道路、畑地が広がる。現状の平面は道路、畑地により削られ三角形を呈するが、墳丘上の等高線は円墳であることを示している。西南側は道路により崖面を形成する。周囲には円礫が多く、葺石が圍繞していたようである（写真図版10-2）。現状では東西31m、南北41m、高さ5.2mを測かり、復原すれば径42m前後と推定される。墳丘の西側で交差する道路付近は、周辺の畑地より若干低く、南側に走る標高58.5mの等高線も同様な微低地形を示すことから、周濠の存在を暗示している。墳丘の復原からは、第4号墳に北東端が接していたものと思われ、また、規模や構築状態、内部構造あるいは近接する立地状態から、後述する御手長山古墳とともに第3~5号墳は、ほぼ同時期における同一家族の墓域と

して、この付近が選地されたものと考えられる。

第5節 万年寺支群

蛭子塚支群の西方、万年寺地区を中心に広範囲に分布する支群である。西限は児玉郡上里町まで至るが、今回は本庄市を中心に確認を行なった。調査前は5基（本庄市内）程墳丘を残していたが、聞き込み調査で多くの古墳が確認された。これらは今後の資料の蓄積とともに複数の支群として細分されるものと思われるが、現状では正確な分布数、状態の把握が困難なため一括して万年寺支群とした。

第1～6号墳 本庄市小島字三空山

本支群中最も大型な円墳である三空山古墳と、その北方に走る本庄段丘崖の間のわずかな傾斜地で確認された（写真図版11-1、2）、標高55m～57mを数え畑地、道路であった。しかし、その後いせやホームセンターの建築に伴ない約1万㎡を本庄市教育委員会が昭和55年9月に発掘調査を実施した。検出された遺構は古墳址6基、近世墓2ヶ所、土坑4ヶ所、溝1本などで、古墳址は第1、2号墳と第3～6号墳の2群で構成されている。これらは完全に削平されており、古墳の伝承はなかった。また、地籍図にもその痕跡はみられなかった（第12図）。

第1号墳は三空山古墳に近接しており、約4分の3が発掘された。直径25m周溝幅2.8m、深さ1.2mを測かる。第2号墳は第1号墳の横に立地し径27m、周溝幅4m、深さ0.6mを数える。第3～6号墳は前2基より東に築造されている。第3号墳が径14m、周溝幅1.6m、深さ0.4m。第4号墳は径12m、周溝幅1.2m、深さ0.4mで、両周溝は東北部で接合している。第5号墳は径19m、周溝幅2m、深さ0.3

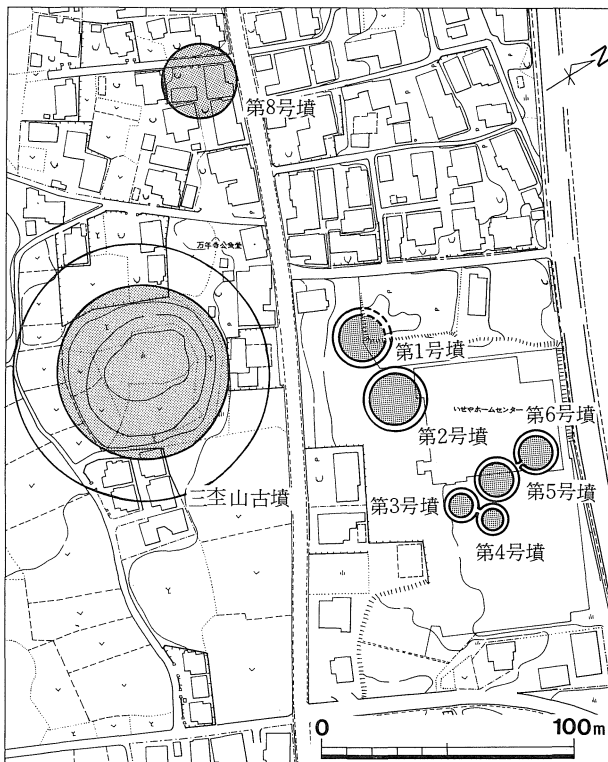
mを見る。北側の第6号墳は径18m、周溝幅2.2m、深さ0.8mを測り南側で周溝はとぎれている。これらは封土面が削平されており、内部主体は不明であるが、周溝より出土した土器は鬼高Ⅰ様式に属するもので、小島、蛭子塚両支群の成立年代とは異なる。

三空山古墳（第7号墳）

本庄第134号遺跡

本庄市小島字三空山42-1(墳丘) 39,40,41,42-2,46,45-4,44,字森西315-1,316,317(周辺)

旭・小島古墳群中最大規模を誇る円墳で、通称しんまち山とも呼称され、古くから周知の古墳である。付近は標高58mを数え、墳丘は畑地、桑畑、草地で、周辺は畑地、宅地となる（写真図版12-1）。400分の1測量図によると墳丘の等高線はほぼ



第13図 三空山古墳周辺古墳分布図

円周を描くが、裾部は耕作のため削られている。周濠の有無については、南側の道路付近を中心に南と北で段が付き、その存在を暗示している。また、北側の墳丘と旧中山道の間にガソリンスタンドのタンクを埋設した際、多量の埴輪片が出土したとのことである。今回は南側に2本のトレンチを設定して範囲確認を行なった(付図3)。墳丘は現墳丘裾より4m南に認められた。周濠は深さ1.5mで堆積土は底部までほぼ黒灰褐色土を基本に埋没していた(第13図)。周濠の外縁は判明しなかったが、道路よりで層序が若干立ち上がっており、道路の南前後までつづくものと思われる。したがって、周濠幅は約18mと推定される。墳丘の復原径は69m、高さ2.4mを測かる。内部主体については伴明しないが、墳頂部に結晶片岩が一枚見られる。また、外観が美里村長坂聖天塚古墳に似ることをあげる。遺物としては土師器微細片の他に、円筒埴輪片が若干みられた。おそらく古墳時代中期に属するものと思われる。

第8号墳 本庄市小島字林50、55-1

三壜山古墳の西方に所在する。現在旧中山道ぞいの集落として立地する万年寺地区の東方にあたり、民家が建ち並ぶ。聞き込み調査によると三壜山古墳の半分ぐらいの大きさで、高さは三壜山古墳より高く、登れば本庄の街並みが見渡せたと伝えられている。ところで、明治 年陸軍陸地測量部の仮製20000分の1尺地形図には三壜山古墳など小高い古墳が記入されている。本墳も同様でその高さがうかがわれる。なお、本墳上に万年寺が建立されていたと言伝えられる。

第8号墳の南方には第9、10、11号墳がみられ、昭和10年の地籍図(第4図)によれば、さらに古墳らしき痕跡が複数認められる。第11号墳の南方100mにあたる下野堂293-2番地からは庭の盛土中に形象、円筒埴輪片が多量に散乱していた。これは道路工事に伴ない出土したとのこと、この周辺にも古墳が存在したことを裏づけている(付図1-A)。

八幡山古墳(第16号墳) 本庄第131号遺跡 本庄市小島95-2(墳丘) 95-1、97、100-1(周辺)

万年寺支群では数少ない残存良好な古墳で、昭和51年12月27日に本庄市指定文化財に選定された。墳丘は雑木林および草地で、南半部は本庄市教育委員会が保存のため盛土復原した(写真図版13-1)。本墳は昭和55年11月に墳丘南方の平坦地に万年寺集会所が建設される際、周濠の確認調査を行なった。周濠は幅10m、深さ1mを数え、周濠内縁と墳丘北裾の距離は7mを測かった。加えて400分の1測量図(付図4)を検討すれば直径約43m、高さ4mの大型円墳であると推定される。採集遺物については円筒埴輪片がみられた。内部主体はかつて緑泥片岩製の箱式石棺が検出されており、5世紀代の盟主級古墳として重要である。

八幡山古墳の南側に近接して第17号墳（本庄第132号遺跡）が存在する。400分の1測量図には円形の等高線が観察され（付図4）、径23m、現高1.7mの円墳と思われる。

第6節 三田支群

万年寺支群の南、国鉄高崎本線を越えた付近一帯に所在する。三田古墳群として周知であるが、旭・小島古墳群の各支群間の密度、距離を考慮して本古墳群の支群に編入した。前方後円墳を含む円墳数基で構成され、西限は上里町に至るが、今回は本庄市域を中心に調査を実施した。

下野堂二子塚古墳（第1号墳） 本庄市下野堂字開拓610.653-12、607-1、2

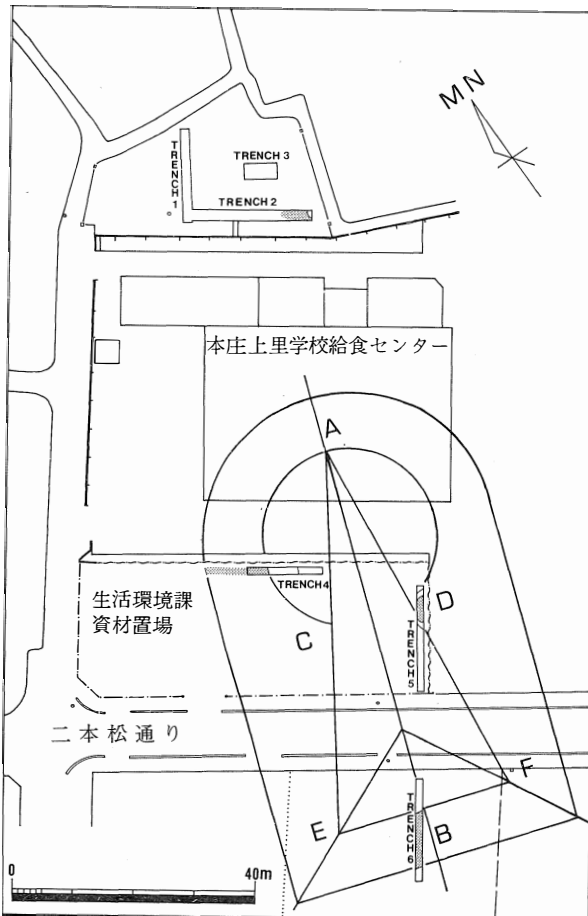
旧児玉郡旭村小島字二子塚518

二子塚の名が示すごとく前方後円墳であったが、規模や内容が不明のまま完全に削平されたことは惜まれる。周辺は工場、宅地、道路、畑等で、古墳址推定地の西側は上里町の境界線が走る。付近の標高は62~63mを数える。前方後円墳は市内において数が少なく未解明な部分も多い。今回は発掘による墳丘裾、周濠の確認と正確な位置づけを行なうことにした。しかし、古墳址と考えられる地点には本庄上里学校給食センター、本庄市生活環境課資材置場、二本松通り、宅地等が立地するため、

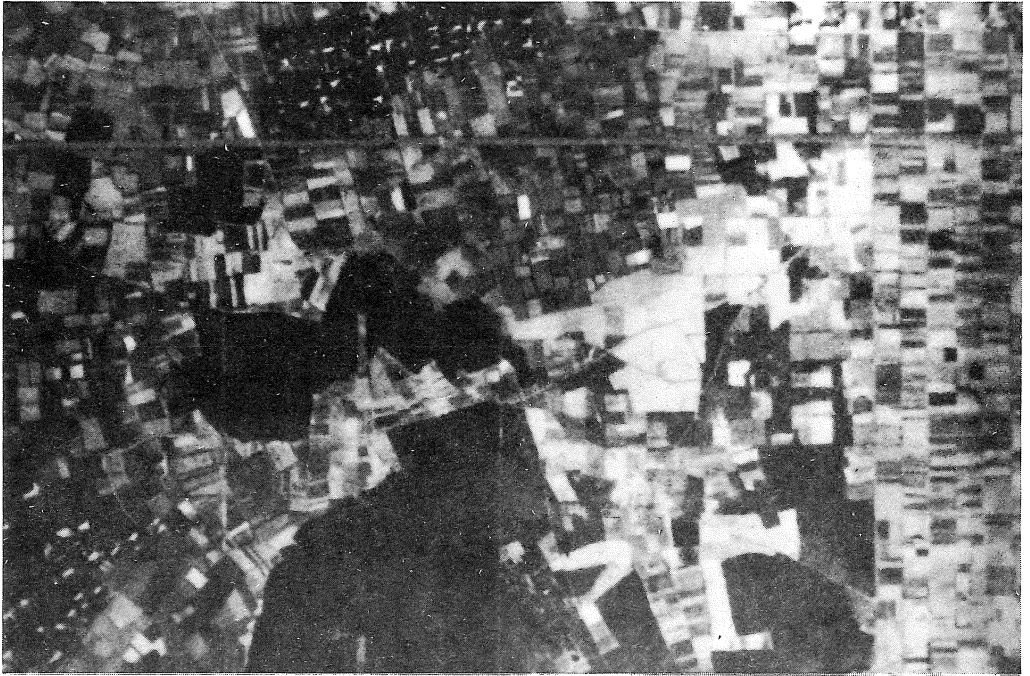
トレンチの設定は制約された。したがって、発掘調査以外の資料による復原が主体となった。

聞き込み調査によれば、下野堂集落より南下する路傍に所在し、墳丘は緩やかではなく子供達の戦争ごっここの陣地として前後2つの墳丘が遊び場となっていた。墳丘の地目は林で、周辺は畑地であったと言う。墳丘の位置については、戦後の削平と土地区画のため旧状の位置づけがむずかしい。墳丘の大まかな位置は南北に主軸を置いていたことなど伴明しているが、南北の裾部の位置についてはそれぞれの記憶が様々であった。

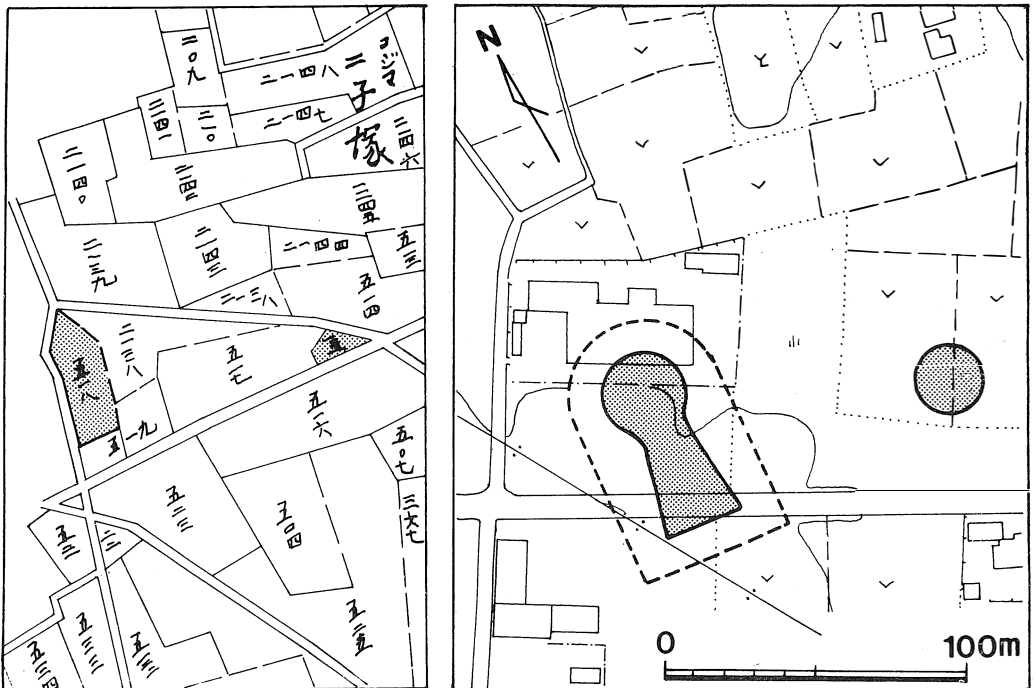
地籍図は時として古墳の位置をよく反映している。現在本庄市農政課が所有している500分の1地籍図は1965年に測量が実施されたものであるが、すでに土地区画整備後とあってまったく古墳らしき輪郭はない。しかし、今一つ、昭和10年に発行された「本庄駅付近図」（第16図）には、墳丘が一区画として記録されている。字二子塚518番地は西側を道路が、



第14図 二子塚古墳周辺平面図



第15図 昭和22年航空写真



第16図 昭和10年地籍図(左)と復原図(右)

東と南側が畑地境界により南北に主軸を置く形でそのなごりをとどめる。地籍図のためか後円部（北側）は円形ではなく三角形を呈している。西側を走る道路はやや入りくみ、クビレ部を示している。前方部は主軸に対して直角ではなく、耕作により削られている可能性がある。また、後円部と前方部はほぼ同じ幅を測かる。周濠の有無については、前方部の南および、東南に方形の畑地がみられるが幅広く痕跡であるのかは不明である。

今回の調査中に二子塚古墳の写真が発掘された。これは昭和22年にアメリカ軍が撮影した航空写真で、原板には長さ1mm程の前方後円形が明瞭に写し出されている（第15図）。後円部の円周は完全に保存されており、下野堂より南下する道の三叉路よりやや南に位置している。前方部は主軸に対して直角ではなく東角は削られているようで、昭和10年の地籍図にも反映されている。この写真を複写し2500分の1地形図に投影したところ、古墳北方の畑地境界、国鉄線、下野堂集落が現地形とすべて一致した。第21図はその復原図で周濠は後述する発掘調査により判明した。

発掘による確認は学校給食センターの北側畑地に3本のトレンチを設定した。しかし、前述の位置復原に示されたごとく周濠、墳丘裾は検出されなかった（第17図）。ただし、第2トレンチの東端に西から東へ急に深くなる掘り方が検出された。なお、第1トレンチの中央で打製石斧1点が出土している。第4、5トレンチは資材置場の北と東に設定した。第4トレンチでは東側で地表下60cmでローム層が露出し、西側で周濠が検出された。周濠の外縁はコンクリート資材のため延長はできなかったが、ボーリングにより幅約10m、深さ1mであることが判明した。第5トレンチは第4トレンチに直角に入れた。この部分ではわずかな範囲で周濠が確認された。深さ1.2mを測かる。第6トレンチは二本松通りの南側で第5トレンチの延長上にあたる。不明瞭な縁辺を示すが幅10m、深さ0.7mを測かり、現状では浅い。周濠の痕跡は第6トレンチ東側のむぎ畑にわずかな高低差で部分的に認められる。

以上の資料を総括して平面企画を第19図に復原した。これを們国男氏の設計企画に照合するとA B : C D : E F は 8 : 2 : 4 を数える。発掘および分布調査で本墳に関連する遺物はみられなかった。したがって、時期推定は墳丘型式にゆだねられる。們氏の方法論を引用すれば、第4型式（応神陵型設計）に近く航空写真や発掘からも前方部の未発達な前方後円墳である。また、聞き込み調査などで石室材らしきものがみられなかったことや、埴輪の類がない点で、かなり古式の古墳と推定される。

第2号墳 本庄第128号遺跡 本庄市下野堂611

下野堂二子塚古墳の東70mに所在する。以前は墳丘の南北に道路が走っていた。現在ねぎ畑となっており、径32m、高さ1.8mを測かる。

第7節 遺物

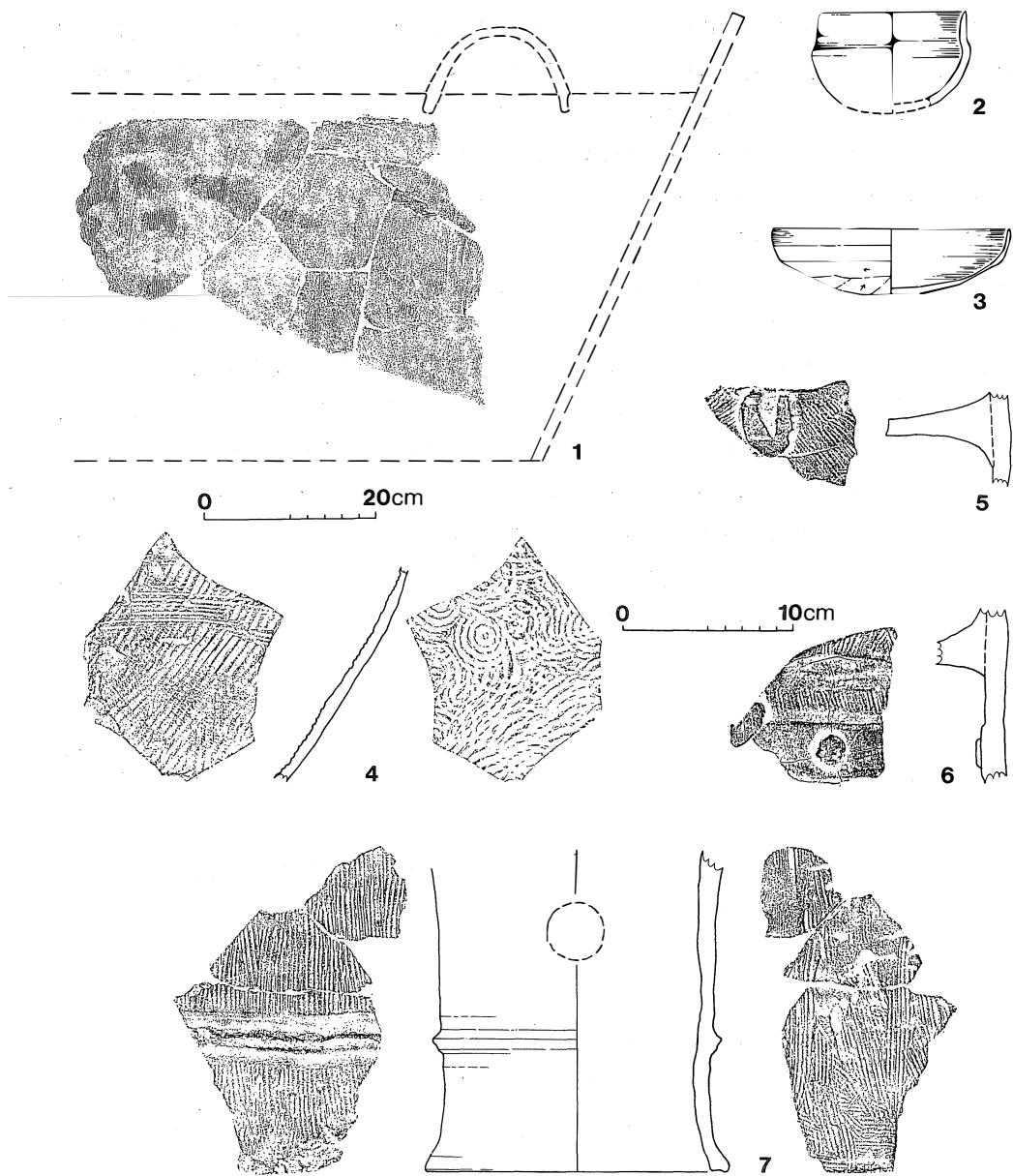
本古墳群より出土採集された遺物は、戦前、戦後を通して幾多にもものぼる。その大半は盗掘等により散失してしまっただが、埴輪、刀剣、玉類の出土伝承は常に周知である。これらの一部は「本庄市史」資料編で紹介されている。今回の調査では埴輪の小片、土器片と若干の石器を得たが、量的な割には図上復原の可能なものが少なかった。埴輪片は個々の古墳址において微量採集されている。これらは良好な資料の増加を待って後日照介する。

発掘調査された蛭子塚支群第1号墳のトレンチからは、最も良好な資料が得られた。第18図1は家埴輪片で現在石膏復原中だが、比較的大形破片より成る。墳丘南裾付近より出土した。屋根部の残片で、粒子の荒い砂質粘土を用い、焼成は良好だが、部分的に剝落が著しい。外面はハケ目整形を加えており、棟近くに赤色顔料による文様がかすかに認められる。縁辺の破風は板状の粘土を接合し、接合面はヘラ状器具で刻ざまれ、接着効力を増している。内面には荒いヘラ状のなでがみられ、屋根片両側辺に直交する壁面の剝離痕跡が観察される。この部分を基本に図上復原すると、高さ約52cm、長さ約96cmを数え、細部の形態は不明だが、御手長山古墳出土家埴輪と同種と考えられる。この埴輪の間より出土した須恵器片は、甕と思われ内面の同心円状タキと外面のタキは深く明瞭で、焼成、胎土とも良好である(4)。これらの遺物の西方で出土した坏はほぼ完形であった。焼成は甘く、胎土に石粒を交じる。表面の剝落がみられ整理は不明だが、口縁周辺の内外においてヨコナデがみられる。口径8.6cm、最大径9.3cm、器高約5.9cm(2)。

蛭子塚支群第2号墳は、ほとんど遺物を認めなかったが、1点の土師器坏をみた。極めて薄い器壁と、良好な焼成状態を示し、胎土も良質である。整形は口縁周辺と内面にヨコナデをほどこし、外面底部はヘラ削りを行なっている。口径14cm、高さ3.9cm(3)。

発掘調査地以外で採集されたものに下野堂の付図1A地点の埴輪がある。周辺に古墳の伝承がない所であるが、かなり以前より散乱していたようである。5は円筒部にヒレ状の突出部を付し、明瞭なハケ調整を行なっている。その上にU字状の粘土帯を付着している。6も同様で突出部の下辺に、円筒部を帯が走り、その上に粘土の円文を付している。左辺にやはりU字状の粘土帯を付着している。これらは人物埴輪など、形像埴輪の残片と考えられるが、他に小片で詳細はわからないが、家埴輪らしきものもみられる。円筒埴輪片も細片が多量採集された。7は最も良好なもので、基部から第2段の部分にあたる。焼成は良好で、胎土に若干の大粒のチャートを含む。内外面とも荒いハケ調整を行ない、第1突帯は細く断面は三角形に近い。第2段に円孔の部分が認められる。器高20cm以上、最大径17.2cm。

旭・小島古墳群の遺物は今後も増加するものと思われるが、現状で遺物のセット関係が最も良好に伴明した御手長山古墳例を見た場合、6世紀末から7世紀初頭前後に係る古墳は円筒埴輪と家埴輪を基本としていたようで、蛭子塚支群第1号墳例のような類例が今後増えるものと思われる。しかし、現状では馬埴輪がみられない点で、今後注意を要する。三奈山古墳、八幡山古墳等ではタガの断面が台形を呈する円筒埴輪細片を得た。だが現状において新旧の遺物をつなぐ、6世紀中葉前後の遺物、古墳址が判明しておらず、今後の研究と調査にゆだねたい。



第18図 遺物実測図

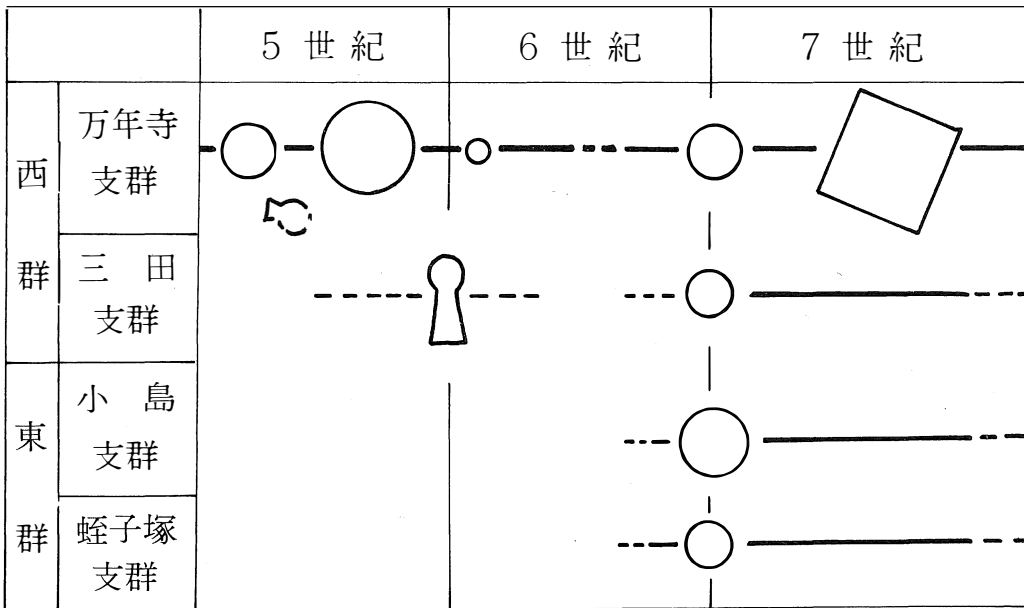
第4章 考 察

大規模な群集墳として周知であった旭・小島古墳群は今回の調査で、広範囲に長期間造営されていたことが判明した。調査の対象は古墳群の範囲確認と、規模の把握であった。このため、すべての古墳について調査がなされたわけではないので、詳細は不明である。しかし、今後の保護と研究に対する資料として、次のような内容と問題を残している。

古墳群の消長 本地域が最初に集団墓として選定されたのは、下野堂方形周溝墓群で和泉期に所属する。一方、古墳として最初に営まれたのは、現状で万年寺支群の八幡山古墳が概当する。八幡山古墳は円墳で、箱式石棺を内蔵する古式古墳である。この被葬者と周溝墓群の被葬者は、両者が近接、あるいは周溝墓群の墓域内に八幡山古墳群が営まれている立地条件から、同一族より、最初に古墳葬制を用いた被葬者の出現を示唆するものと考えられる。八幡山古墳に近接した万年寺支群第17・18号もまた、発掘されていないが近接する造営年代が推定される。これらの一群よりやや離れて、東方に三空山古墳が所在する。この古墳は採集された円筒埴輪片などから前者の古墳や周溝墓群と相前後する時期と思われるが、旭・小島古墳群中で古墳の出現が、周溝墓群と重複する万年寺支群中に発生することは葬制の変化を把握する上で興味深い。本古墳群における出現期の古墳が、八幡山古墳、三空山古墳等、円墳を採用している事実は、埼玉県における他例と同様である。このような類例は本市内においても、前山2号墳、公卿塚に代表される。旭・小島古墳群の発生地点とも解される万年寺支群には、万年寺支群第1～6号のような鬼高Ⅰ様式期に属するもの。角閃石安山岩製の横穴石室を内蔵、あるいは内蔵すると思われる浅間山古墳、万年寺支群第20・25・27号が存在し、近辺で発掘調査された資料と合わせると、6世紀末から8世紀初頭に至る一群も立地する。したがって、存続年代は本古墳群中で最も長期におよんだ支群と言えよう。これに対して、東側にあたる小島支群、蛭子塚支群は、御手長山古墳、坊主山古墳をはじめとして、6世紀後半から7世紀代に出現しており、このような支群の形成時期差は常に指摘されている。以上の様相に対して三田支群では、前方後円墳である二子塚古墳が突如単独で出現しているのは、その墳形とともに特異な状況を暗示している。この支群にも、円墳数基が在存するが、第6号墳に代表されるごとく、ほとんどは横穴石室を有する後期古墳と思われる。したがって、各支群中にはすべて、横穴石室を有する6～7世紀代の古墳が存在するものの、墳形や出現時期が異なり、各支群の消長は次表のような状態を示している。

墳形と掘り方 旭・小島古墳群は、そのほとんどが大小の円墳で構成されている。しかし、これ以外において若干の前方後円墳、帆立貝式古墳、方墳が認められる。これらの墳形と大型円墳は、各支群における盟主的存在と思われるが、円墳を除いては、数量的に一世代的な産物である。前方後円墳である二子塚古墳は、前述したごとく古式古墳である。帆立貝式古墳と推定される万年寺支群第18号墳は、八幡山古墳の外堤に近接しており、時期も近いものと思われる。方墳である万年寺支群第22号墳は、一辺77mの大型方墳であるが、その年代は発掘調査されたにもかかわらず不明である。しかし、北関東地方における大型方墳の出現期は、群馬県宝塔山古墳をはじめとして、7世紀代に多くみられることは、本墳の築造年代について暗示するものと思われる。円墳と推定されるもののほとんどは、周溝を周らすものと推定されるが、この中には陸橋を有するものがある。このような類例の中には、

墳丘裾の輪郭や平面形が、帆立貝式古墳と相通づる面があり、陸橋の有無や、この部分の調査も、削平された古墳においては必要なことであるが、それには全面調査がなされなければならない。ところで、平坦地で古墳を造営する時、封土として用いられる土砂の調達について若干の問題がある。古墳の周囲には掘り方が周り、この土砂を盛土に流用したものと思われるが、墳丘規模と掘り方の規模は必ずしも比例しない。盛土を残す古墳の調査例がほとんどない事と、削平された古墳が多いため、土量計算による事例はあまりない。そのため核心にふれることはできないが、ただ単に周囲を広く深く掘り、封土を築造した例のみではないようである。上里町では天明3年に降下した火山灰をかき集めた土盛が、塚と呼称されているが、古墳築造時にも掘るだけでなく、周辺から表土をかき集めて土砂を調達した方法も考えられる。古墳築造の種類により、周りの掘り方の用途も再確認する必要がある。古墳の墳丘裾を周る掘り方については、周溝や周堀、周濠と言った名称がなされ、古くより研究されている。今回の調査では、層序の観察から、下部に粘土層が堆積し、その上層にヘドロ様の黒灰褐色粘質土が、厚く堆積している類例が多く認められた。このことは単なる空堀ではなく、雨水などで泥湿化していたものと思われる。また規模などから用語を分ける必要性もあろう。



墓地と集落 本庄段丘崖上に沿って広がる土器散布地（本庄1～10号遺跡）の多くは、奈良・平安時代に属する。この内古墳時代に所属する小島本伝遺跡は、和泉期の住居址が確認されている。その西方100mには同期に周溝基群と万年寺支群が出現しており、互いに関連する遺跡と考えられる。しかし、小島・蛭子塚両支群が形成されはじめる時期には台地上に集落址らしき遺構・散布地は認められず墓域の拡大とともに居住地の移動も行なわれたのであろう。それにしても百数十基を数える大古墳群の被葬者を出した村々と、その生産基盤が今後問題となろう。このような観点に立つ時、段丘崖下に広がる利根川の氾濫原は肥沃で、農耕地としての条件を満たしており、自然提防や微高地上には、現集落が立地している。この氾濫原の下流に形成された妻沼低地には、弥藤後新田遺跡や古墳が、自

然提防上に所在する類例もある。このため現在居住生産遺跡は確認されていないが、注意しなければならない地域である。ところで、本庄段丘崖縁には、百基を越す群集墳がもう1ヶ所立地する。旭・小島古墳群の東南方3kmに所在する塚合古墳群で、本庄市内において大規模な群集墳が、神流川・利根川の氾濫原に面する段丘崖縁部に、2者立地することは興味深い。両古墳群は規模的に対峙する。この立地のあり方が、互いに異なる郷の墓地選定を示唆するならば、郷の境界は両古墳群の間に位置すると（7世紀代の場合）思われる。しかし、考古学上の資料からは集落址、遺物などにさらに検討されるべき要素を多く残す。このため各地点における埋蔵文化財の有無や遺構の確認が必要とされる。おわりに 旭・小島古墳群は、北武蔵における烏川、利根川流域の大規模古墳群として、古墳時代における当該地の動向を探求する時、重要な遺跡である。集落、開拓等により古墳の削平は古来より進行して来たが、現状において伝承、地籍にさえ残されていない古墳址が、相当存在するものと思われる。これらに対しては、全面的な発掘調査の必要性を指示するものである。支群の分類については、現状で古墳址と判明したものの集合状態などからまとめたが、万年寺、三田支群と小島、蛭子塚支群の東と西のグループに大別することも可能である。しかし、埴輪片の分布状態（付図1 三角印）が示すように、古墳の近辺や支群間にも散布しており、支群および古墳群の範囲が今回の調査で確定されたわけではない。本古墳群を包括する地域には、土器器散布地も重複するが、これらの遺跡も古墳群と相対的に関連するものと考えられ、小島・下野堂地区全体を通して係る埋蔵文化財の保護と調査が継続される必要性を残している。

引用・参考文献

- 本庄市教育委員会 1981 『本庄市の文化財』
- 長谷川 勇 1978 『御手長山古墳発掘調査報告書』 本庄市教育委員会
- 紫崎起三雄・水島治平・長谷川 勇 1976 「考古資料」『本庄市史』 資料編
- 菅谷浩之 1969 『本庄市塚合古墳調査報告書』 本庄市教育委員会
- 並木 隆 1976 「本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉県考古学会、埼玉県遺跡調査会、埼玉県教育委員会
- 大護八郎 1956 「本庄市及び児玉郡の古墳について」『古墳調査報告書』 第1編 埼玉県教育委員会
- 稲村垣元・他 1951 「古墳時代」『埼玉県史』 第1巻 埼玉県
- 柳田敏司・金井塚良一・原島礼二 1980 『鉄剣を出した国』学生社
- 塩野 博 1980 「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』 第20号 埼玉県文化財保護協会
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1975 『いぶき一児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究—』 第8・9号
- 小林国夫編 1965 『関東ローム』
- 山岸良二 1881 『方形周溝墓』
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』 第64巻第2号 日本考古学会
- 梶 国男 1975 『古墳の設計』

上田宏範 1981 『前方後円墳』 第2版 学生社

小久保徹 1978 『埼玉県遺跡発掘調査報告書—東谷・前山2号墳・古川端—』 第16集 埼玉県教育委員会

市川 修 1980 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会

大塚初重編 1981 『日本の古墳—東日本編—』 有斐閣選書

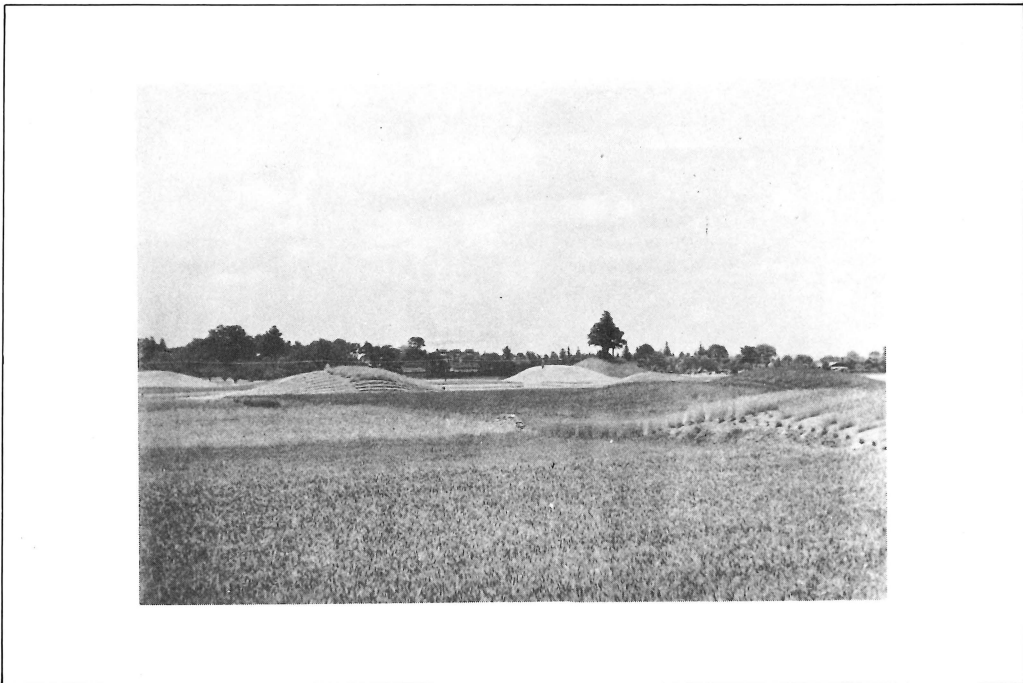
埼玉県教育委員会 1975 『埼玉県遺跡地図』



1. 旭・小島古墳群航空写真（昭和55年撮影）



1. 近八幡支群現状（南より北を望む、手前は高崎本線）



2. 蛭子塚支群旧状（昭和14年栗田剛氏撮影、右側大木は御手長山古墳）



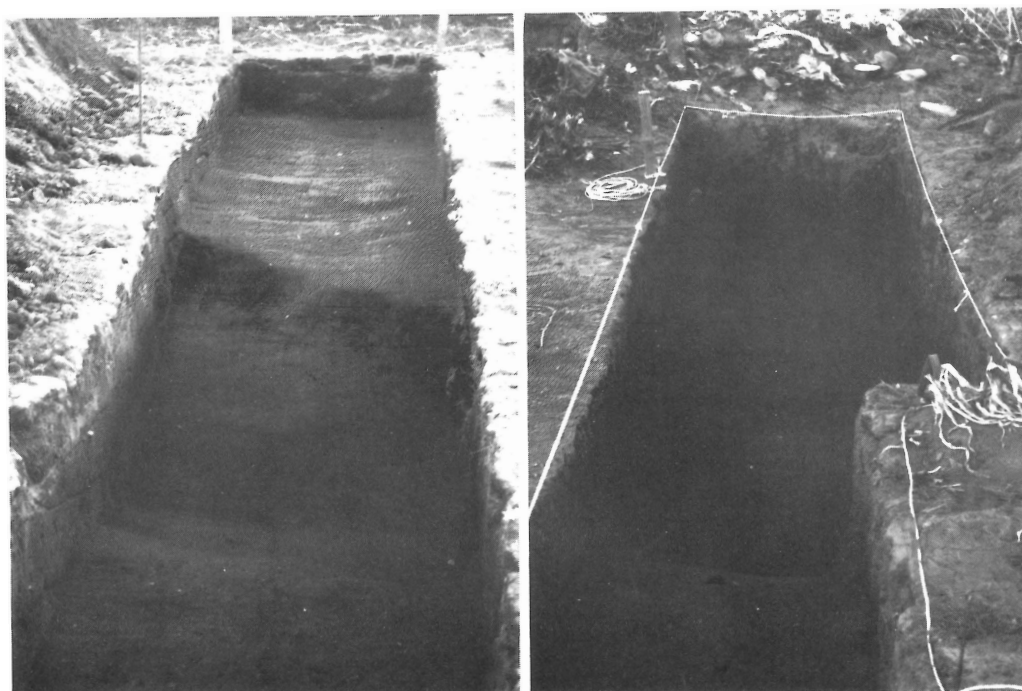
1. 蛭子塚支群第1、2号墳近景（東より西を望む）



2. 蛭子塚支群第1号墳葺石材集石状態



1. 蛭子塚支群第1、2号墳第1トレンチ（左）と第3トレンチ（右）



2. 蛭子塚支群第1、2号墳第4トレンチ（左）と第5トレンチ（右）



1. 蛭子塚支群第1号墳第1トレンチ出土の打製石斧（左）と須恵器（右）



2. 蛭子塚支群第1号墳第3トレンチの葺石、埴輪出土状態



1. 蛭子塚支群第9号墳近景（東より西を望む）



2. 蛭子塚支群第9号墳第1トレンチ墳丘、周濠部



1. 諏訪大明神古墳近景（西より東を望む）



2. 小島支群第2号墳近景（東より西を望む）



1. 小島支群第3、4、5号墳遠景（西より東を望む）



2. 小島支群第4号墳近景（西より東を望む）



1. 小島支群第3号墳近景（南より北を望む）



2. 小島支群第3号墳封土露出状態（北崖面）



1. 小島支群第5号墳近景（南より北を望む）



2. 小島支群第5号墳葺石露出状態（西斜面）



1. 万年寺支群第1号墳（三笠山遺跡）



2. 万年寺支群第3、4、5号墳（周溝接近状態）



1. 三奈山古墳近景（南より北を望む）



2. 三奈山古墳第1トレンチ（左）と第2トレンチ（右）



1. 八幡山古墳近景（西より東を望む）



2. 八幡山古墳封土断面（南より北を望む）



1. 万年寺支群第17号墳近景（西より東を望む）



2. 万年寺支群第20号墳近景（西南より東北を望む、後方住宅地は下野堂方形周溝墓群）



1. 万年寺支群第26号墳近景（南より北を望む）



2. 上里町浅間山古墳近景（南より北を望む）



1. 三田支群第2号墳近景（北東より南西を望む）



2. 三田支群第6号墳（東より西を望む）

埼玉県本庄市

旭・小島古墳群発掘調査報告書

昭和57年3月26日印刷

昭和57年3月31日発行

発行 本庄市教育委員会

本庄市銀座1-1-1

印刷 本庄孔版社

本庄市朝日町3299